

## 第2章

# キャリア教育 推進のために

## 第1節 校内組織の整備

## 1 キャリア教育の推進と校長の役割

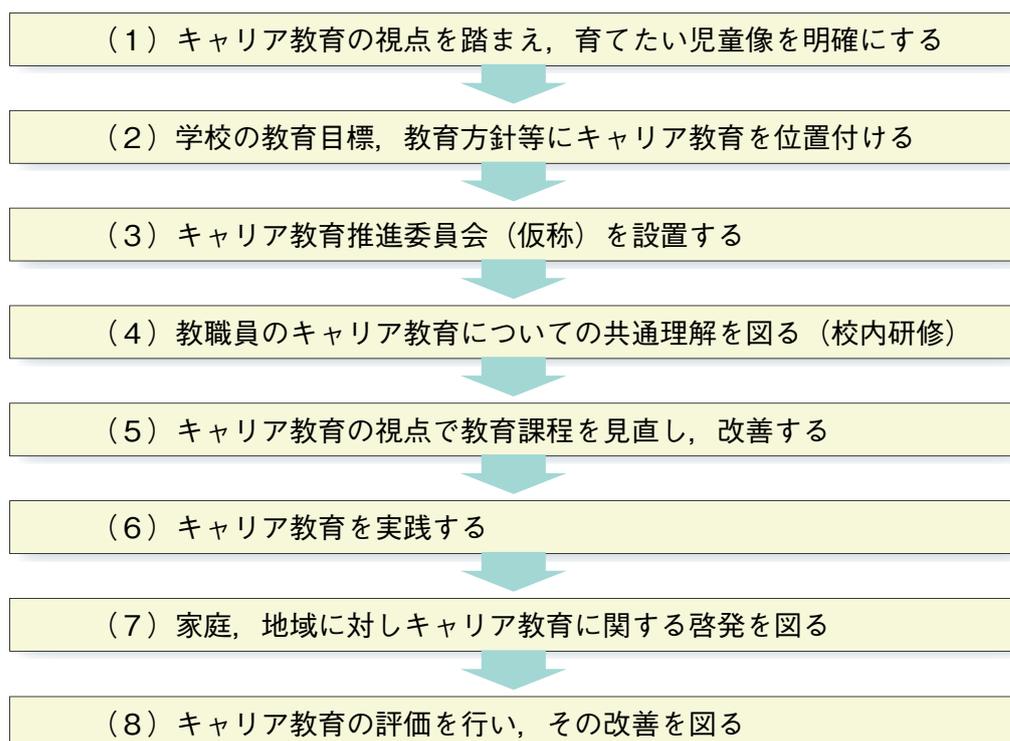
各学校における教育課程は、校長のリーダーシップのもと、全教職員が協力して編成していくものである。特に、キャリア教育は、児童が行うすべての学習活動等が影響するため、学校のすべての教育活動を通して推進されなければならない。

また、キャリア教育は、目標及び育成したい能力・態度、教育内容・方法等について、各学校が決定していかなければならないことから、校長はその教育的意義や教育課程における位置付けなどについての考えを全教職員に示し、実施に向けて「キャリア教育推進委員会」等の校内組織を整えていかなければならない。そして、全教職員が互いに連携を密にして、キャリア教育の指導計画の作成及び運用を図っていくよう導いていく必要がある。

さらに、キャリア教育では、校外の様々な人や施設、団体等からの支援が欠かせない。家庭の理解と協力も必要である。また、学習に必要な施設・設備、予算面については、設置者からの支援が欠かせない。このことから、校長は、自校のキャリア教育の目標や教育内容、実践状況について、学校便りやホームページ等により積極的に外部に情報発信し、広く協力を求めることが大切である。

そこで、各学校においてキャリア教育を推進していくためには、次のような手順例が考えられる。

## 学校におけるキャリア教育推進の手順例



## 2 校内推進体制の整備

各学校では校長の方針に基づき、キャリア教育の目標が達成できるように、全教職員が協力して全体計画を作成し、円滑に実践していく校内推進体制を整える必要がある。校内推進体制の整備に当たっては、全教職員が目標を共有しながら適切に役割を分担するとともに、教職員間及び校外の支援者と連絡を密にして進めていくことが肝要である。

ここでは、児童に対する指導体制と実践を支える運営体制の二つの観点から、キャリア教育のための校内推進体制の在り方について述べることとする。

### (1) 児童に対する指導体制

キャリア教育にかかわる授業は、実際に指導を進めていく学級担任が指導者となって進められることが多い。日ごろから、学級担任は各教科等の授業を通して児童をよく理解しており、児童の実態を踏まえて各教科、道徳、外国語活動、総合的な学習の時間、特別活動と関連を図るなど、創意あふれる実践が行いやすい。

一方、キャリア教育の学習が進む中で、児童の体験的な活動の幅が広がったり多様化したり、児童の追究が次々と深化したりするにつれて、学級担任一人だけでは対応できない状況が出てくる。このような場合に、他の教員の協力を得てTT（ティームティーチング）を行う体制を整えたり学級の枠をはずして同学年の教員が指導を分担したりする工夫も必要となる。また、学習内容によっては、専科の教員や養護教諭等の専門性を生かした学校全体の支援体制が必要になる。

このような複数の教員による指導を可能にするには、時間割の工夫のほか、全教員が自分の学級や学年だけでなく、他の学級や学年のキャリア教育の実施状況を十分把握しておくことが大切である。その意味で、学級担任は、キャリア教育の実施状況を様々な形で他の学級や学年に公開する必要がある。例えば、日常の授業の公開のほか、児童の学習活動の様子を廊下に掲示したり学級便りや学年便りの記事にしたりすることが有効である。また、全教員で実践状況を紹介し合い、互いに学び合うようなワークショップを行うことも、学校全体の学習状況の理解を深めると同時に、教員の協同性を高めることにつながる。

### (2) 実践を支える運営体制

キャリア教育では、児童の問題解決や体験的な活動の広がりや深まりによって、複数の教員による指導や校外の支援者との協力的な指導が必要になる。また、教科書がない学習活動を展開する場合には、指導内容や指導方法等をめぐって、指導する教員が気軽に相談できる仕組みを組織に位置付けておくことも求められる。さらに、指導に必要な施設・設備の調整や予算の配分や執行を行う役割も校内に必要である。このように、キャリア教育の推進に当たっては、校内に指導に当たる教員を支える体制を整える必要がある。

そこで、次に示す校内分担例を参考に、校長は各学校の実態に応じて校内規程を整備し、教員の実践を学校全体で支える仕組みを整える必要がある。

#### ア キャリア教育の実践を支える校内分担例

副校長・教頭	運営体制の整備，校外の支援者・支援団体との渉外
教務主任	各種計画の作成と評価，時間割の調整
研修担当	キャリア教育にかかわる研修の企画・運営

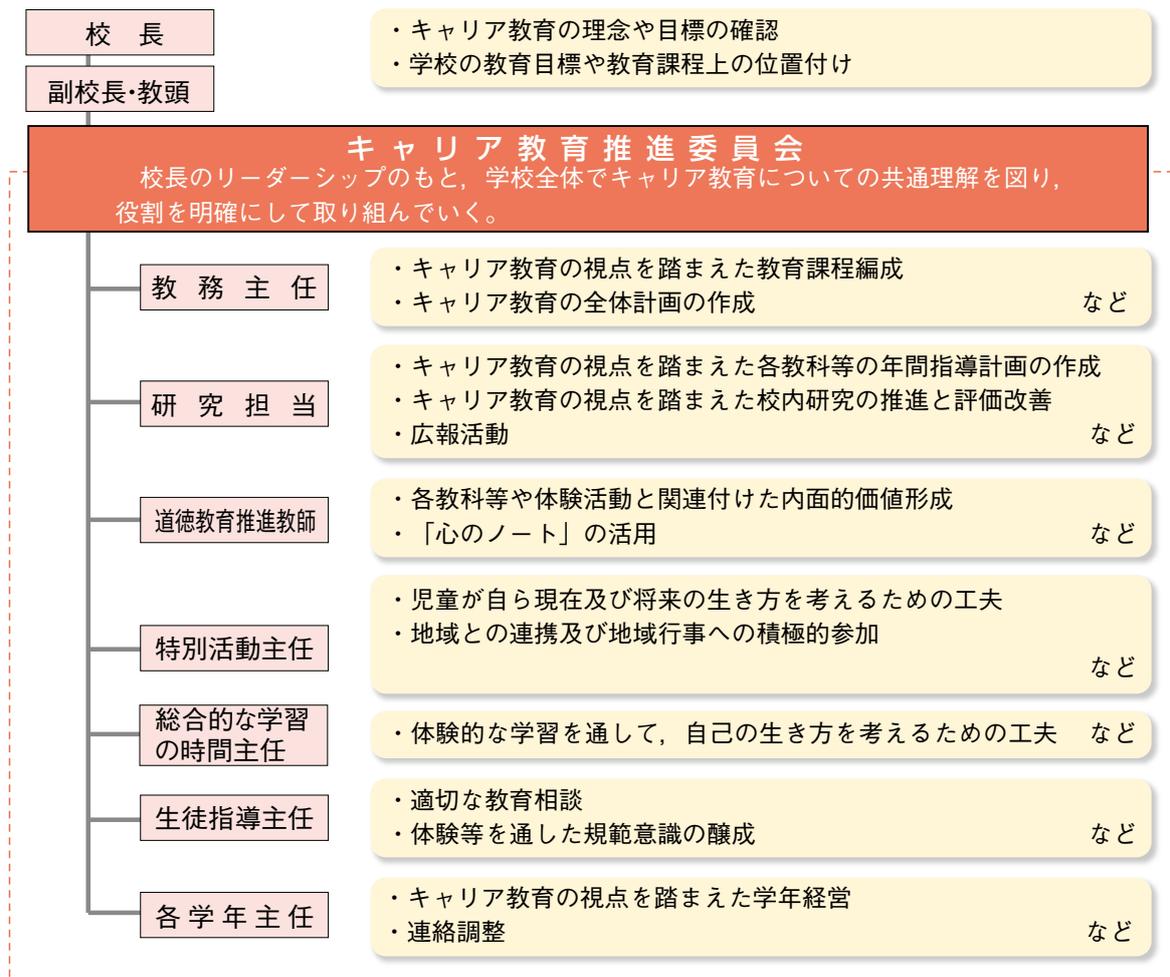
学年主任	学年内の連絡・調整, 研修, 相談
図書館担当	必要な図書を整備, 児童の図書館活用支援
機器担当	情報機器等の整備及び配当
安全担当	学習活動時の安全確保
養護教諭	学習活動時の健康管理, 健康教育にかかわること
事務担当	予算の管理及び執行

### イ キャリア教育推進委員会

キャリア教育の全体計画及び年間指導計画の実施や評価, 各分担及び学年間の連絡・調整, 実践上の課題解決や改善等を図るためには, 関係教職員による組織づくりが必要である。

構成については学校の実態によって様々であろうが, 例えば, 下図のような組織が考えられる。協議内容によっては, 図書館教育担当や養護教諭, 情報教育担当等を加える場合もあろう。小規模校であれば, 教頭, 教務主任, 研究担当, 特別活動主任などから構成することも考えられる。

これらの関係教職員の連携強化のために連絡・調整を行うとともに, キャリア教育推進委員会の円滑な運営を図るほか, 全体計画をはじめとする各種計画の作成・運用・評価についての調整, 校外の支援者との連携のためにコーディネート役の教員を置くことも有効である。



## ウ 学年部会

キャリア教育は、学年ごとに共通テーマを設け、年間指導計画を作成・実施している学校が多い。異学年間で実践を行う場合も、学年の担当者を窓口に関係者間で連携が図られることが多い。このことから、学年部会は、キャリア教育の運営上の重要な役割をもつと言える。

学年部会は、学級間の連絡・調整のみならず、指導計画の改善や実践に伴って次々と生まれる諸課題の解決や効果的な指導方法等について学び合うなど、研修の場としても大切な役割が期待される。

また、学年部会では、実践上の悩みや疑問が率直に出され、互いに自由な雰囲気ですれ違えるよう配慮することが大切である。そのことが、教員同士の協同性を高め、キャリア教育の改善のための日常的な営みを容易にしていく。

なお、小規模校では、3・4学年部会と5・6学年部会あるいは3～6学年合同部会を構成して、実践交流や情報交換を行うなどの工夫により、協同性や協力体制を向上させることが考えられる。

## 3 教員研修

キャリア教育にかかわる授業を充実させ、その目標達成の鍵をにぎるのは、指導する教員のカリキュラム編成・運用能力、そして授業での指導力である。さらに、地域や学校、児童の実態に応じて、特色ある学習活動を生み出していく構想力も必要である。また、キャリア教育は、教員がチームを組んで互いに持ち味を発揮して指導に当たることによって、児童の多様な学習状況に対応できるのであり、各学校では、教員全体の指導力向上を図る必要がある。したがって、教員研修の中でもとりわけ校内研修を充実させることは、各学校にとって極めて重要である。

校内研修のねらいや内容は、各学校の職員構成や実践上の課題等に応じて適切に定めていくべきものであるが、まずは、本書を参考に、学校において定めるキャリア教育の目標、育成したい能力・態度、キャリア教育の教育課程における位置付けや各教科、道徳、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動との関連、全体計画、年間指導計画、単元の指導計画の作成及び評価等について、全教員の認識を深めておく必要がある。また、研修内容については、できるだけ実践する教員の希望に沿ったものとしたい。

研修の実施については、教員が一堂に会して行うだけでなく、学年単位や課題別グループ単位等の少人数で実施するなど、課題に応じて弾力的に、そして継続的に実施していくことが必要である。また、研修方法については、講義形式のほか、ワークショップや事例研究、演習方式等、学校の実態や研修のねらいに応じて適切な方法を採用したい。

また、年間の研修計画に授業研究を位置付け、児童の学習に取り組む姿を介して教員の指導や支援等について評価し、指導力の向上を図ることも必要である。

さらに、キャリア教育に関する全体計画、年間指導計画、実践記録、児童の作品や作文等の写し、映像記録、参考文献等を一箇所に集めて整理・保存し、いつでも検索できるようにしておくことも、研修の推進にとって有効である。

このようにして校内研修を進めることが、全教員が協同してキャリア教育に取り組む体制の確立につながるのである。

一方、校長は校外で行われる研修会や研究会に積極的に教員を派遣し、その成果を自校に役立てることが大切である。また、近隣の学校同士で実践交流を行い、互いに学び合う機会を設けることも、実践力の向上に役立つ。

## 教員研修の一例

回	研修のテーマ	目的	内容例及び留意点
第一回	キャリア教育の意義	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 小学校におけるキャリア教育の意義を理解する。</li> <li>・ 社会の仕組みや経済社会の構造について理解を深める。</li> <li>・ キャリア教育の推進に不可欠な教員全体の意識を高める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 指導者養成研修を受講した講師を招き、キャリア教育が求められる背景（社会の仕組みや経済社会の構造などを含む）やその基本的な理念について学ぶ。</li> <li>・ グループに分かれて、キャリア教育についてのそれぞれがもつイメージを話し合う活動等も有効である。</li> </ul>
第二回	キャリア教育の目標の設定	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自校の児童のキャリア発達上の課題や育成したい能力・態度を明らかにし、キャリア教育の目標を設定して、目指す児童像を明らかにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み（例）」（p.10 参照）を参考にして、学校独自のキャリア教育の目標を検討し、目指す児童像を明確にする。</li> <li>・ 育成したい能力・態度と各教科等との関連を考え、年間指導計画を作成する。</li> </ul>
第三回	キャリア教育の視点に立った授業づくり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ キャリア教育の視点に立った指導計画を作成する能力を高める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 年間指導計画を受け、育成したい能力・態度とのかかわりを明確にしなが、各教科等の単元指導計画や一時間の指導計画を作成する。</li> </ul>
第四回	家庭や地域との効果的な連携	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 家庭や地域との連携の重要性を理解する。</li> <li>・ 家庭や地域のキャリア教育に対する理解を促進する。</li> <li>・ 各学校の特性を生かした効果的な連携の進め方について考える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 講師（企業人やキャリア教育関係者）を招き、教員、保護者、地域の人々を対象に講演会を実施する。</li> <li>・ 保護者や地域の人々に協力を依頼できる活動内容や協力を仰ぐ方法と同時に、キャリア教育の趣旨を的確に伝える方法について話し合う。</li> <li>・ 日頃からの保護者との関係づくりが重要であるという認識に立ち、保護者会の効果的な進め方などについても考える。</li> </ul>
第五回	キャリア・カウンセリング	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 基本的なカウンセリング能力が全教員に必要であることを理解し、その実際を学ぶ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 教員と児童のコミュニケーション能力を高める。</li> <li>・ ビデオ視聴やその逐語録を見ることで、児童の話聴く際の望ましい態度や応答・在り方について理解を深める。</li> </ul>

## 小学校でのキャリア・カウンセリングについて

キャリア・カウンセリングという言葉から、中学3年時、高校3年時に行われる卒業直後の進路決定の相談を思い浮かべるとしたら、小学校ではほとんど実践する必要はないでしょう。実践に入る前に、キャリア・カウンセリングを正確に理解しておくことが大切です。

学校におけるキャリア・カウンセリングは、発達過程にある一人一人の子どもたちが、個人差や特徴を生かして、学校生活における様々な体験を前向きに受け止め、日々の生活で遭遇する課題や問題を積極的・建設的に解決していくことを通して、問題対処の力や態度を発達させ、自立的に生きていけるように支援することを目指しています。これはキャリア教育の目標と同じです。ただ、キャリア・カウンセリングは「対話」、つまり教師と児童生徒との直接の言語的なコミュニケーションを手段とすることが特徴です。

小学校でのキャリア・カウンセリングの実践は広義と狭義の両面から考える必要があります。

広義の実践は、小学校がこれから続く学校生活の基盤として、学校や教師への信頼、そして学ぶことへの喜びを体験する大切な時期であるという認識に立って、教師がそれぞれの子どもの存在を尊重して温かい人間関係を築くことを目的としています。そのために教師は、一人一人の子どものコミュニケーションを図る能力を向上させることが不可欠となります。

狭義の実践とは、子どもたちが新たな環境に移行したり未経験の学習課題に取り組む際に不安が大きく問題を引き起こしやすいことを意識し、単に不安の解消や問題解決だけでなく、新たな環境や課題に勇気をもって取り組めるよう個別に支援することです。キャリア発達支援そのものと言えるでしょう。例えば、1年生は初めての学校生活に不慣れなために様々な課題や問題を抱えており、他の学年においても学年始め・学期始めや学年末・学期末には新学級や新学年への適応で問題を経験する時期です。特に6年生は中学校進学という大きなステップを乗り越える準備のときでもあり、中学校へ勇気をもって進めるよう個別支援をしていくことが不可欠です。

